

<原著> 青年期ダウン症者の自己制御機能に関わる 要因の検討

| | |
|----------|--|
| 著者 | 小島 道生, 池田 由紀江 |
| 著者別名 | Kojima Michio, Ikeda Yukie |
| 雑誌名 | 心身障害学研究 |
| 巻 | 24 |
| ページ | 9-19 |
| 発行年 | 2000-03 |
| その他のタイトル | <Original Articles>Factors Affecting Self-Regulation in Adolescents with Down Syndrome |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/8637 |

原 著

青年期ダウン症者の自己制御機能に関わる要因の検討

小 島 道 生*・池 田 由 紀 江**

青年期ダウン症者を対象として、自己制御機能に関わると予想される要因について検討した。自己制御機能の特に行動基準の内面化に関わる要因として、社会的視点取得能力、表情認知能力、状況認知能力と自己制御機能との相関を求めた。その結果、社会的視点取得能力と状況認知能力に自己制御機能と中程度の相関が認められた。しかし、表情認知能力との相関は認められなかった。従って、青年期ダウン症者の自己制御機能には、社会的視点取得能力と状況認知能力が関与していることが示唆された。

キー・ワード：青年期ダウン症者 自己制御機能 行動基準の内面化

I. はじめに

ダウン症児のパーソナリティ特性は、しばしば「明るく、朗らかな」等の記述がなされ(建川, 1968²⁰⁾)、一般に非社会的問題行動は少ない印象がある。しかし、青年期を迎えたダウン症者には、非社会的問題行動として「引きこもり」や「がんである」ことが高い割合で認められると指摘されている(細川・池田・橋本・菅野, 1992⁵⁾; 1998⁶⁾; Gibbs and Thrope, 1983³⁾; Chicione, McGuire, Hebein and Gilly, 1994¹⁾)。さらに、近年では青年期ダウン症者に日常生活の能力が急激に低下する「退行」といわれる症例がみられることも報告されている(杉山・山中, 1989¹⁹⁾; 横田, 1996²⁵⁾)。このように、ダウン症者は青年期において特有な非社会的問題行動が生じているといえよう。

青年期ダウン症者が示すこのような非社会的問題行動は、自らの意志で社会的に適切な行動を十分統制することが困難であるために生じていると推察される。つまり、青年期ダウン症者は自己の行動を統制する能力が未発達であると

推測される。従って、青年期ダウン症者の行動統制に関わる要因を明らかにすることは、青年期ダウン症者が示す非社会的問題行動についても有益な示唆が得られることが期待される。そして、青年期ダウン症者の行動統制に関わる重要な要因として、自己制御機能が指摘されている(Cuskelly and Gunn, 1997²⁾)。本研究では、自己制御機能を先行研究(Thorensen and Mahoney, 1974²¹⁾; 柏木, 1988⁸⁾; 山崎・白石, 1993²⁴⁾)を参考に、自分の意志・意図に基づき自ら行動を統制する働きと定義し、自己主張と自己抑制から構成されるとする。

小島・池田(1999¹⁰⁾)は、知的障害者の自己制御機能を測定する質問紙を開発し、調査した。その結果、青年期ダウン症者の特徴として、自己主張では拒否や強い自己主張に関しては高いものの、自分から積極的に他者とかかわっていくことや主体的に物事に取り組むことに関しては低いことを明らかにした。また、自己抑制の特徴としては、学校等の規則を守ることは高いものの、自分の要求が受け入れられない場面での感情抑制に関しては低いことを示した。

近年、自己制御機能について、行動基準が内面化される過程と、その行動基準に合わせて自

*筑波大学心身障害学研究科

**筑波大学心身障害学系

ら行動を統制する過程の二つに分けて捉える見解が示されている (Zelazo and Rezinck, 1991²⁶⁾; 水野・本城, 1998¹³⁾)。この見解に基づくと、青年期ダウン症者は特に対人場面での行動基準の内面化に関わる能力が低いと推察される (小島・池田, 1999¹⁰⁾)。つまり、状況や他者の感情を認知する能力が低いため、他者とのやりとり場面での積極性や自分の要求が受け入れられない場面での感情抑制が低いと推測される。従って、青年期ダウン症者の自己制御機能では、特に行動基準の内面化が重要であるといえる。そこで、本研究では青年期ダウン症者の自己制御機能において、対人場面での行動基準の内面化に関わる要因について明らかにする。

自己制御機能において、対人場面での行動基準の内面化に関与していると予想される要因のひとつとしては、役割取得に関する能力がある。山岸 (1995²³⁾) は、健常児の研究において社会的場面での役割取得に関する能力が行動基準の内面化に関わっていることを指摘している。この社会的場面での役割取得に関する能力は、Selman and Yeates (1987¹⁸⁾) が新たに社会認知的立場から、社会的視点取得 (Social Perspective Taking) 能力—自他の視点を分化し他者の視点から考えたり、自他の視点を関連づける能力—として、対人交渉方略に対応したモデルを提唱している。このモデルでは、対人葛藤場面での対人交渉方略 (Interpersonal Negotiation Strategy) の発達レベルと社会的視点取得能力には密接な関連性があるとされている。そして、このモデルは青年期においてもその妥当性が実証され、現実の社会的不適応行動を予測することが明らかにされている (Leadbeaters, et al., 1989¹¹⁾)。我が国においても、仮説的に設定した対人葛藤場面を用いた研究において、Selman and Yeates (1987¹⁸⁾) のモデルの妥当性が実証されている (渡部, 1993²²⁾)。そこで、本研究でも仮説的に対人葛藤場面を設定し、そこでの対人交渉方略をもとに社会的視点取得能力を測定することにする。

次に、対人場面での行動基準の内面化に関わ

Table 1 被験者の生活年齢、精神年齢、語彙年齢

| | 生活年齢 | 精神年齢 | 語彙年齢 |
|------|-----------|---------|---------|
| 平均 | 15.2歳 | 5.4歳 | 5.3歳 |
| 標準偏差 | 2.02 | 1.34 | 1.20 |
| 範囲 | 11.6~18.4 | 3.2~9.5 | 3.0~7.8 |

る要因としては、他者感情推測能力があげられる。人は、他者とのやりとり場面において、他者の感情を無視して行動基準を設定した場合、自己中心的で自己制御機能が未発達であると判断される。つまり、適切に他者の意図を踏まえて行動をとることができるか否かは、自己制御機能の行動基準を設定する過程において重要な要素であると推察される。また、青年期ダウン症者は他者理解や感情の共感性が未発達であるために、向社会的行動が生じにくいことが報告 (水田・水田, 1997¹⁴⁾) されている。そこで、本研究では他者感情推測能力に重要な要素とされている表情認知能力と状況認知能力 (Mehrabian, 1986¹²⁾; Gnepp, Klayman, and Trabasso, 1982⁴⁾) を取りあげる。

以上のように、本研究では青年期ダウン症者の自己制御機能のうち、特に行動基準の内面化に関わると予想される要因について検討する。具体的には、社会的視点取得能力、表情認知能力、状況認知能力について自己制御機能との関連性を検討し、行動基準の内面化に関わる要因を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 被験者

養護学校に通う生活年齢 11 歳から 18 歳のダウン症者。本実験における言語反応が可能な精神年齢が 3 歳以上のダウン症者 35 名。なお、事前に担任の教師あるいは保護者に本実験の内容を説明し、実験可能であると判断された被験者に対して実施した。

被験者の平均生活年齢、平均精神年齢、平均語彙年齢は Table 1 の通りである。精神年齢は、全訂版田研・田中ビネー知能検査、語彙年齢は

Table 2 知的障害者の自己に関する行動調査質問紙

| 質問項目 |
|--|
| <p>自己主張</p> <p>「能動性・主体性」</p> <p>意見を聞いたり、感想を求めると、自分なりの考えや感想を出す。 他の友達と自分の意見が違っていると臆せず主張する。 他の友達に自分の考えやアイデアを話す。 社会見学等の買い物場面で自分の考えているものを買える。 自分の考えや意見を自分から述べる。 持久走大会などで苦しくなった時に自分でそのことを伝えられる。 数種類の学習活動を設定した場面で、自分の挑戦した場を選択できる。 体調の悪い時に訴えることができる。 将来の進路について自分の考えを意志表示できる。 学習の時に、教材の選択場面で自分の好きな教材を選択できる。 自分のやりたい係り活動や役割を意志表示できる。 自分が何かをしたい時に許可を求めることができる。 感分を求められた時に何らかの感情や気持ちを示せる。</p> |
| <p>「拒否・強い自己主張」</p> <p>自分の順番に他の人が割り込んできた時、「いけない、私の番だ」と意志を示す。 友達に意地悪されると「やめてくれ」と意志を示す。 嫌なことははっきり嫌と意志を示す。 友達に惑わされずに自分のやりたいことを意志表示できる。 自分の期待したものと違うものが渡された時「違う」と意志表示する。 遊びたい玩具を友達が使っている時、「貸して」と意志を示す。 してほしいこと、ほしいものをはっきり大人に頼める。 他の友達の言いなりになる。 他人の助けが欲しい時お願いできる。 自分のやりたいこと、楽しく感じていることを意志表示できる。</p> |
| <p>「友人への積極性」</p> <p>自分のやりたい遊びを友達を誘って始められる。 人から促されないと行動が起こせない。 遊びたい友達を自分から誘って遊べる。 入りたい遊びに自分から「入れて」という意志を示す。</p> |
| <p>自己抑制</p> <p>「待機行動」</p> <p>「後であげます」と言えば待てる。 「してはいけない」と言われたことはしない。 「ちょっと待っていなさい」で待てる。 遊びの中で順番を待てる。 友達のものや他の人が使っている玩具がほしいとすぐにとる。 給食やおやつが配られるのを待てる。 検診の時などは指示に従う。</p> |
| <p>「他者との協調性」</p> <p>指示されたことが苦手なことや難しいことでも遂行できる。 他の人のものが欲しくても我慢する。 仲間と意見がくい違った時には願望を抑える。 自分には不都合だったり損なことでも他の人のためにゆずれる。 仲間と意見が違う時、相手の意見を受け入れられる。 教師に話しかけた時、他の人が話している間待っている。</p> |
| <p>「感情抑制」</p> <p>したいことをとめられるとやめる。 悲しいこと、くやしいこと、つらいことなどの感情をすぐに爆発させずに抑えられる。 集団の中で我慢できる。 要求が受け入れられなかった時にかんしゃくを起こす。</p> |
| <p>「規則への従順」</p> <p>課せられた仕事を途中で放りださないうで、最後までやり通す。 してはいけない時があることがわかり、やめる。 他の人と同じ物を欲しがらる。 休み時間と授業中の区別ができない。 遊びたくても係りの仕事などしなければならぬことができる。 給食やおやつの時、自分の好きなものを他の人の分も食べてしまう。 授業中に他のことに興味がうつり離席する。</p> |

絵画語彙発達検査 (PVT) により 1998 年 9 月から 10 月に測定した。

2. 測定の課題

(1) 自己制御機能の課題

自己制御機能の課題は、小島・池田 (1999¹⁰⁾) が柏木 (1988⁸⁾) の質問紙を基に、知的障害者の自己制御機能を測定するために新たに開発した「知的障害者の自己に関する行動調査質問紙」を用いた (Table 2)。本質問紙は、知的障害者を対象として調査を行い、質問紙を分析した結果、高い信頼性・妥当性が証明されている (小島・池田 1999¹⁰⁾)。また、本質問紙は自己主張と自己抑制の二領域から構成されている。そして、自己主張の下位次元として、「能動性・主体性」、「拒否・強い自己主張」、「友人への積極性」の 3 下位次元があり、自己抑制の下位次元として「待機行動」、「他者との協調性」、「感情抑制」、「規則への従順」の 4 下位次元がある。なお、本質問紙は他者評定である。

(2) 社会的視点取得課題

社会的視点取得課題に関しては、まず現職の養護学校の小学部、中学部、高等部の教員 6 名に日頃養護学校でよくみかける対人葛藤場面について聞き取り調査を実施した。その結果、音楽と体育の授業中において教材が人数分足りず、被験者と友人との間において葛藤が生じる場面を用いることにした。

紙芝居は、4 枚の画用紙 (縦 29.7 センチ、横 42 センチ) で構成され、一つの物語は 2 分である。具体的内容は、Table 3 の通りである。

(3) 他者感情推測課題

他者感情推測課題は以下の 2 つの課題から構成した。

① 表情認知課題

表情認知課題として、先行研究 (Schlosberg, 1952¹⁷⁾; 石井・今野, 1987⁷⁾) で用いられていたものの中から、笑顔、怒っている顔、悲しい顔の 3 つの絵 (縦 29.7 センチ、横 21 センチ) を課題として使用した (Fig.1)。なお、これら課題の内容的妥当性は先行研究 (Schlosberg, 1952¹⁷⁾; 石井・今野, 1987⁷⁾) において証明され

Table 3 社会的視点取得課題の紙芝居の内容

<音楽場面>

音楽の授業でタンバリンの練習をするようになった。みんな一斉にタンバリンを取りに行った。主人公の A 君はタンバリンを取ることができたが、仲のいい友達の B 君だけ数が足りず、タンバリンを取ることができなかった。A 君はタンバリンの練習をしていたが、B 君は A 君が練習している様子をじーと見ていた。B 君は、とってもやりたそうな様子であった。すると、B 君は「貸して」と言って A 君が使っていたタンバリンを取りにきた。

<体育場面>

体育の授業でボールの練習をするようになった。みんなが一斉にボールを取りに行った。主人公の A 君はボールを取ることができたが、仲のいい友達の B 君だけ数が足りず、ボールを取ることができなかった。A 君はボールで練習をしていたが、B 君は A 君が練習をしている様子をじーと見ていた。B 君はとってもやりたそうな様子であった。すると、B 君が「貸して」と言って A 君が使っていたボールを取りにきた。

ている。

② 状況認知課題

状況認知課題として、健常男児 1 名 (小 5) が



Fig. 1 表情認知課題の絵

Table 4 状況認知課題の VTR の内容

| |
|--|
| 〈喜び場面〉 |
| 誕生日に主人公がケーキを心待ちにしている時、母親がケーキを買ってきてくれる。 |
| 〈怒り場面〉 |
| 主人公が楽しく読んでいた漫画を友人に強引に取られる。 |
| 〈悲しみ場面〉 |
| 大切に飼っていた金魚が突然死んでしまう。 |

主人公となって演じている喜び、怒り、悲しみの各物語を VTR に録画した (Table 4)。それぞれの物語は約 1 分で構成されている。なお、内容的妥当性の検討として、この課題を本実験における被験者と精神年齢が同じ範囲 (4 歳から 6 歳) の健常幼児 10 名を対象として個別に実施した。その結果、100% の正答率が得られた。

3. 測定の手続き

自己制御機能の測定は、1998 年 7 月から 9 月にかけて実施した。

社会的視点取得課題と他者感情推測課題は、1998 年 9 月から 10 月にかけて実施した。実験は、VTR 装置を設置した部屋において個別に実施した。各被験者に対して、社会的視点取得課題、表情認知課題、状況認知課題を順に行った。各課題において、紙芝居及び絵の提示順序、VTR の提示順序はカウンターバランスを考慮しながら各被験者ごとにランダムに変えた。測定の所要時間は、1 人あたり約 15 分であった。

(1) 社会的視点取得課題

紙芝居での登場人物の親近性を統制するため、被験者を主人公とし被験者と一番仲のいい同性の友達が脇役で登場することを伝え、紙芝居を読み聞かせた。紙芝居終了後、被験者に「どうする？」と行動を予測させた。そして、被験者の回答後、予め用意しておいた 12 の方略を描いた絵カードを用いて、被験者の回答と同じ絵を提示し、被験者の回答に対して確認をした。なお、被験者が予め用意しておいた絵カード以外の方略を回答することはなかった。

(2) 他者感情推測課題

① 表情認知課題

笹屋 (1997¹⁶⁾) の手続きを参考に、被験者に「今からある人の顔をみてもらいます。その人の顔がどんな気持ちを表しているか教えて下さい。」と尋ね、口頭で自由回答させた。

② 状況認知課題

笹屋 (1997¹⁶⁾) の手続きを参考に、被験者に「今から男の子が出てくるお話をいくつかテレビで見てもらいます。あとで、いくつか質問するからよく見てね。」と教示を行った後、各物語の VTR の課題を呈示し、ラスト場面で主人公が感情を表出する直前で VTR を静止状態にした。そして、「この後、この人はどういう気持ちになるでしょうか」と尋ねた。喜び、怒り、悲しみの 3 課題についてこの手続きを繰り返した。

4. 評価の方法

(1) 得点化

自己制御機能の測定は、質問紙の評価段階にそって以下のように得点を与えた。「ほとんどない」に 1 点、「少ないほう」に 2 点、「ふつう」に 3 点、「やや多い」に 4 点、「きわめて多い」に 5 点を与えた。なお、全質問項目のうち 10 項目は逆転項目であった。従って、それらの項目は得点を逆転させた。よって、得点が高いほど自己制御機能の発達が良好であるという結果になっている。

社会的視点取得課題は、Selman and Yeates (1987¹⁸⁾) のモデル (Table 5) に従い、発達レベルに合わせて 0 点から 3 点の 4 段階で得点化を行った。

表情認知課題と状況認知課題は、笹屋 (1997¹⁶⁾) を参考に、よく理解している (2 点)、類似した感情について述べている (1 点)、理解していない (0 点) の 3 段階で得点化を行った。

なお、社会的視点取得課題、表情認知課題、状況認知課題は実験場面を録画した VTR を基に、2 名の観察者が得点化を行った。評価に不一致が生じた場合は、協議を行い両者の合意が得られるまで検討した。

Table 5 対人交渉方略の発達段階と社会的視点取得能力の関係 (Selman & Yeats, 1987より)

| | 他者を変える方向 | 社会的視点取得能力 | 自分を変える方向 |
|------|--|-----------|--|
| レベル0 | 自分の目標を得るために非反省的・衝撃的・非言語的に力を使う 喧嘩・暴力的にとる・たたく | 未分化・自己中心的 | 自分を守るために非反省的・衝撃的・非言語的に引きこもるか従う 泣く・逃げる・隠れる・無視する |
| レベル1 | 一方的に命令して他者をコントロールする 命令する・脅す・主張する | 分化・主観的 | 自分の意志を持つことなく他者の希望に従う 従う・あきらめる・助けを待つ |
| レベル2 | 他者の気持ちを変えるために心理的影響力を意識的に使う 促してさせる・収賄・物々交換始めにやる理由を言う | 自己内省的・相互的 | 相手の希望に心理的に従って自分の希望は2番目に位置づける 調節・物々交換・2番目にやる理由を尋ねる |
| レベル3 | 第三者的・相互的 相互的な目標を追求し自他の両方の欲求を協力的に変えるために自己内省と共有された内省の両方を使う 相互の欲求と関係を考慮して葛藤を解く・協力する | | |

・レベルは、対人交渉方略に基づく社会的視点取得能力の発達段階を示す。

(2) 自己制御機能の得点と社会的視点取得課題の得点、表情認知課題の得点、状況認知課題の得点との関連性

自己制御機能の得点を目的変数、社会的視点取得課題の得点、表情認知課題の得点、状況認知課題の得点を予測変数として重相関分析を行った。また、自己制御機能の二領域である自己主張と自己抑制もそれぞれ目的変数とし、社会的視点取得課題の得点、表情認知課題の得点、状況認知課題の得点を予測変数として重相関分析を行った。そして、自己主張及び自己抑制と関連性が認められた能力については、各下位次元の得点と Pearson の積率相関係数を求めた。

(3) 一致率

社会的視点取得課題、表情認知課題、状況認知課題について、観察者2名の一致率を求めた。その結果、それぞれ100%、94.3%、97.1%であった。

III. 結果

自己制御機能、社会的視点取得課題、表情認知課題、状況認知課題の平均得点及び標準偏差は Table 6 の通りである。Table 7 は、社会的視

点取得課題、表情認知課題、状況認知課題の各課題における得点分布である。

社会的視点取得課題に関しては、全ての被験者が2度の社会的視点取得課題において、2度とも同じレベルの対人交渉方略を用いた。その結果、合計得点は0点、2点、4点となった。そして、合計得点が2点の者が17名と最も多かった。表情認知課題に関しては、合計得点が3点と4点の者が8名と最も多かった。また、状況認知課題に関しては、合計得点が2点の者が9名と最も多かった。

自己制御機能の得点を目的変数、社会的視点取得課題の得点、表情認知課題の得点、状況認知課題の得点を予測変数とした回帰分析を行った。その結果は、Table 8 の通りである。社会的視点取得課題の偏回帰係数は0.35 ($F(3,34) = 5.16, p < .05$)、表情認知課題の偏回帰係数は0.05 ($F(3,34) = 1.06, p > .10$)、状況認知課題の偏回帰係数は0.45 ($F(3,34) = 7.04, p < .05$)であった。従って、自己制御機能の得点に対して社会的視点取得課題の得点と状況認知課題の得点は有意であるが、表情認知課題の得点は有意ではなかった。なお、このときの回帰式全体の

Table 6 各課題の平均得点及び標準偏差

| | 自己制御機能の課題 | 社会的視点取得課題 | 表情認知課題 | 状況認知課題 |
|------|-----------|-----------|--------|--------|
| 平均得点 | 3.25 | 2.11 | 3.80 | 3.43 |
| 標準偏差 | 0.58 | 1.45 | 1.45 | 1.69 |

Table 7 各課題の得点分布

| 合計得点 | 社会的視点取得課題 | 表情認知課題 | 状況認知課題 |
|------|-----------|--------|--------|
| 0 | 8 | 0 | 1 |
| 1 | 0 | 2 | 3 |
| 2 | 17 | 5 | 9 |
| 3 | 0 | 8 | 4 |
| 4 | 10 | 8 | 8 |
| 5 | 0 | 7 | 5 |
| 6 | 0 | 5 | 5 |

・単位は人

Table 8 回帰分析の結果

| | 自己制御機能 | 自己主張 | 自己抑制 |
|-----------|--------|-------|--------|
| 社会的視点取得課題 | 0.35* | 0.33 | 0.32* |
| 表情認知課題 | 0.05 | 0.09 | 0.10 |
| 状況認知課題 | 0.45** | 0.40* | 0.50** |

・数値は、偏回帰係数

・*は $p < .05$ 、**は $p < .01$

説明率は $R^2 = .63$ であり、有意であった ($F(3,31) = 17.29, p < .01$)。

次に、自己制御機能の二領域である自己主張と自己抑制の得点をそれぞれ目的変数、社会的視点取得課題の得点、表情認知課題の得点、状況認知課題の得点を予測変数とした回帰分析を行った。その結果は、Table 8 の通りである。自己主張の得点を目的変数とした場合の社会的視点取得課題の偏回帰係数は 0.33 ($F(3,34) = 3.55, p > .10$)、表情認知課題の偏回帰係数は 0.09 ($F(3,34) = 0.42, p > .10$)、状況認知課題の偏回帰係数は 0.40 ($F(3,34) = 4.57, p < .05$) であった。この時の回帰式全体の説明率は $R^2 = .72$ であり、有意であった ($F(3,31) =$

Table 9 状況認知課題及び社会的視点取得課題と下位次元別の相関係数

| 下位次元 | 状況認知課題 | 社会的視点取得課題 |
|-----------|--------|-----------|
| 〈自己主張〉 | | |
| 能動性・主体性 | 0.68 | — |
| 拒否・強い自己主張 | 0.68 | — |
| 友人への積極性 | 0.67 | — |
| 〈自己抑制〉 | | |
| 待機行動 | 0.74 | 0.65 |
| 他者との協調性 | 0.74 | 0.69 |
| 感情抑制 | 0.69 | 0.73 |
| 規則への従順 | 0.75 | 0.66 |

・相関係数の数値は、全て $p < .01$

18.5, $p < .01$)。

一方、自己抑制の得点を目的変数とした場合の社会的視点取得課題の偏回帰係数は 0.32 ($F(3,34) = 4.35, p < .05$)、表情認知課題の偏回帰係数は 0.10 ($F(3,34) = 0.64, p > .10$)、状況認知課題の偏回帰係数は 0.50 ($F(3,34) = 9.37, p < .01$) であった。この時の回帰式全体の説明率は $R^2 = .80$ であり、有意であった ($F(3,31) = 18.5, p < .01$)。

さらに、自己主張の下位次元である「能動性・主体性」、「拒否・強い自己主張」、「友人への積極性」及び自己抑制の下位次元である「待機行動」、「他者との協調性」、「感情抑制」、「規則への従順」の得点と状況認知課題の得点について Pearson の積率相関係数を求めた。同様、自己主張の下位次元の得点と状況認知課題の得点について Pearson の積率相関係数を求めた。その結果は、Table 9 の通りである。状況認知課題の得点と自己主張の下位次元である「能動性・主体性」、「拒否・強い自己主張」、「友人への積極

性]はいずれも有意であった ($F(1,33)=28.75, p<.01$; $F(1,33)=28.75, p<.01$; $F(1,33)=26.47, p<.01$)。また、状況認知課題の得点と自己抑制の下位次元である「待機行動」、「他者との協調性」、「感情抑制」、「規則への従順」もいずれも有意であった ($F(1,33)=39.29, p<.01$; $F(1,33)=39.29, p<.01$; $F(1,33)=30.00, p<.01$; $F(1,33)=43.08, p<.01$)。一方、社会的視点取得課題の得点と自己抑制の下位次元である「待機行動」、「他者との協調性」、「感情抑制」、「規則への従順」は全て有意であった ($F(1,33)=23.33, p<.01$; $F(1,33)=30.00, p<.01$; $F(1,33)=37.86, p<.01$; $F(1,33)=25.88, p<.01$)。

IV. 考 察

1. 社会的視点取得能力と自己制御機能との関連性

社会的視点取得能力の発達レベルは、Selman and Yeates (1987¹⁸⁾) のモデル (Table 5) における4段階のうち、レベル3に該当する被験者はいなかった。最も発達レベルの高いレベル3は、第三者的立場に立ち相互的な対人交渉能力が必要とされる段階である。従って、相互の欲求と関係を考慮して葛藤を解いたり協力することは青年期ダウン症者にとって非常に困難なことであることが明らかとなった。

また、社会的視点取得能力と自己制御機能は中程度の関連性が認められ、特に自己抑制において関連性があることが示された。また、自己抑制の下位次元別に検討した結果、社会的視点取得能力は「感情抑制」と最も関連性があることも明らかとなった。これらより、青年期ダウン症者においては社会的視点取得能力が自己制御機能に関与し、特に自己抑制での「感情抑制」と関連性が強いと推察される。社会的視点取得能力を発達させるには、人と接触する対人葛藤など様々な視点を含む社会的相互作用が効果的であると報告されている (山岸, 1995²³⁾)。従って、青年期ダウン症者においても社会的相互作用といわれる対人葛藤場面をより多く経験する

ことは、特に自己抑制の行動基準の内面化において重要であると考えられる。

また、この他に社会的視点取得能力に関与する要因としては、従来より親のしつけ態度があげられてきた (Keller, 1976⁹⁾)。親のしつけ態度としては、子どもの行為が他者にもたらす結果やそれに対する子どもの責任を指摘する誘導的なしつけ、あるいは子どもの意見を真剣に取り上げ話し合うことを認める態度が重要である (山岸, 1995²³⁾)とされてきた。従って、青年期ダウン症者においても、他者視点能力を促すようなしつけ方略を用いることは、自己抑制での行動基準の内面化を促進させるために重要であると考えられる。

2. 表情認知能力と自己制御機能の関連性

表情認知課題の平均得点は、3.94点で、状況認知課題に比べて高得点の結果となった。しかし、表情認知能力は自己制御機能との関連性は認められなかった。これは、表情認知能力が行動基準の内面化には関与していない可能性を示唆するものである。相手の感情を理解するために、表情認知能力は非常に重要であり、コミュニケーションにおける感情情報伝達の55%が表情によることが指摘されている (Mehrabian, 1986¹²⁾)。しかし、青年期ダウン症者の表情認知能力と自己制御機能においては関連性がなかった。今後、このような特徴が青年期ダウン症者に特徴的なことか、非ダウン症者や健常者と比較する必要があると思われる。

3. 状況認知能力と自己制御機能の関連性

状況認知課題の合計得点は、0点から6点までの被験者が認められ、表情認知課題に比べて平均得点も低かった。健常者を対象とした笹屋 (1997¹⁶⁾)の研究では、5歳を境に状況認知課題の方が表情認知課題よりも得点が高くなることが報告されている。本実験での被験者のうち、精神年齢が5歳を越えている者でも、表情認知課題に比べて状況認知課題は得点が低くなっていた。

この要因としては、まず青年期ダウン症者が健常者に比べて状況を認知することが困難であ

る可能性があげられる。また、状況認知課題で用いたのはVTRであり、継時的に呈示されるいくつかの場面を記憶して状況を把握する必要があった。従って、青年期ダウン症者は健常者に比べてより継時的な情報処理を不得手とする(Pueschel, et al., 1987¹⁵⁾) ため、状況認知課題を達成する者が少なかったこともあげられる。しかし、いずれの要因によるものかは、本実験からは判断できない。今後は、課題を統制して表情認知課題との関連性について検討する必要があると思われる。

また、状況認知能力は、自己制御機能及び自己主張や自己抑制とも関連性が認められた。そして、下位次元別に検討した結果、特に自己抑制の「待機行動」、「他者との協調性」、「規則への従順」と関連性があることが示された。これは、状況認知能力は自己制御機能における自己主張と自己抑制に関与し、その中でも自己抑制の「待機行動」、「他者との協調性」、「規則への従順」と関連性が強いことを示唆するものである。青年期ダウン症者を対象として向社会的行動について研究を行った水田・水田(1997¹⁴⁾)の研究においても、状況に応じた向社会的行動が生起されず、決まったパターンでの社会的行動をとることが報告されている。従って、状況認知は向社会的行動においても重要な役割を示していると推察される。今後は、状況認知能力を発達させるような発達援助の方法について検討を行い、青年期ダウン症者の自己制御機能の行動基準の内面化を促進する方法を検討する必要があると思われる。

VI. まとめ

本実験より、自己制御機能の行動基準の内面化の過程では、社会的視点取得能力と状況認知能力が中程度関連していることが示唆された。その中でも、社会的視点取得能力は自己抑制と関連性があり、状況認知能力は自己主張と自己抑制の両方に関連性があることが示された。一方、表情認知能力は自己制御機能の発達とは関連性がないことも示唆された。従って、今後は

社会的視点取得能力や状況認知能力を育むような働きかけを行うことで、自己制御機能がどのような変化をするか検討する必要がある。

文 献

- 1) Chicone, B., McGuire, D., Hebein, S., and Gilly, D. (1994) Development of a clinic for adults with Down syndrome. *Mental Retardation*, 32, 100-106.
- 2) Cuskelly, M. and Gunn, P. (1997) Behavior Concerns. Pueschel, S. M. and Maria, S. (Eds.). *Adolescents with Down Syndrome*. Baltimore: PaulH. Brookes Publishing.
- 3) Gibbs, M. V. and Thrope, J. G. (1983) Personality stereotype of noninstitutionalized Down syndrome children. *American Journal of Mental Deficiency*, 87, 601-605.
- 4) Gnepp, J., Klayman, J., and Trabasso, T. (1982) A hierarchy of informational sources for inferring emotional reactions. *Journal of Experimental Child Psychology*, 33, 111-123.
- 5) 細川かおり・池田由紀江・橋本創一・菅野 敦 (1992)学齢期および青年期ダウン症児・者の適応行動の特徴. *心身障害学研究*, 16, 111-116.
- 6) 細川かおり・池田由紀江・橋本創一・菅野 敦 (1998)ダウン症児の学校における適応行動の特徴. *東京学芸大学特殊教育研究施設研究年報*, 75-82.
- 7) 石井清一・今野義孝(1987)自閉症児の表情認知に関する研究. *教育心理学研究*, 35(4), 344-350.
- 8) 柏木恵子(1988)幼児期における「自己」の発達行動の自己制御機能を中心に. *東京大学出版会*.
- 9) Keller, M. (1976) Development of role taking ability, social antecedent and consequences for school success. *Human Development*, 19, 120-132.
- 10) 小島道生・池田由紀江(1999)青年期ダウン症者のSelf-Regulationに関する研究. *日本発達心理学会第10回大会発表論文集*, 393.

- 11) Leadbeaters, B.J., Hellner, I., Allen, J.P., and Aber, J.L. (1989) Assessmen of interpersonal negotiation strategies in youth engaged in problem behaviors. *Developmental Psychology*, 25, 465-472.
- 12) Mehrabian, A. (1986) Communication without words. *Psychology Today*, 2(4), 53-55.
- 13) 水野里恵・本城秀次(1998)幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連. *発達心理学研究*, 9(2), 131-141.
- 14) 水田茂久・水田善次郎(1997)ダウン症児・者の向社会的行動. *日本特殊教育学会第35回大会発表論文集*, 9(2), 131-141.
- 15) Pueschel, S.M., Gallagher, A.S., Zartler, A.S., and Pezzullo (1987) Cognitive and Learning Processes in Children with Down Syndrome. *Research in Developmental Disiabilities*, 8, 21-37.
- 16) 笹屋里絵(1997)表情および状況手掛りからの他者感情推測. *教育心理学研究*, 45(3), 312-319.
- 17) Schlosberg, H. (1952) The description of facial expressions in terms of two dimensions. *Journal of Experimental Psychology*, 44, 229-237.
- 18) Selman, R.L. and Yeates, K.O. (1987) Childhood social regulation of intimacy and autonomy : A developmental-constructionist perspective. In W.M. Kurtines and J.L. Gewirtz (Eds.), *Moral Developmental through Social Interaction*. New York : Wiley, 43-101.
- 19) 杉山登志郎・山中 昂(1989)Down症候群に見られる青年期退行. *第29回日本児童青年精神医学会総会抄録集*, 32.
- 20) 建川博之(1968)ダウン症候群児の personality traits. *東京学芸大学特殊教育施設研究紀要*, 2, 214-231.
- 21) Thorensen, C. and Mahoney, M.J. (1974) *Behavioral self-control*. New-York : Holt. Rinehart & Winston.
- 22) 渡部玲二郎(1993)児童における対人交渉方略の発達—社会的情報処理と対人交渉方略の関連性—. *教育心理学研究*, 41(4), 452-461.
- 23) 山岸明子(1995)道徳性の発達に関する実証的・理論的研究. *風間書房*.
- 24) 山崎 晃・白石敏行(1993)幼児の自己実現を自己主張と自己抑制からとらえる. *保育学研究*, 31, 104-112.
- 25) 横田圭司(1996)ダウン症候群における「退行」. *発達障害白書. 精神薄弱者福祉連盟編*.
- 26) Zelazo, P.D. and Rezinck J.S. (1991) Age-related asynchrony of knowledge and action. *Children Development*, 62, 719-735.

Factors Affecting Self-Regulation in Adolescents with Down Syndrome

Michio KOJIMA and Yukie IKEDA

The purpose of the present study was to examine the factors possibly related to self-regulation by conducting a questionnaire among 35 adolescent Down syndrome subjects enrolled at special schools. Self-regulation was found to be separated by the internalization of rules from the control behavior. Then, as factors that are believed to related to the internalization of rules, the abilities of taking social perspective, recognizing expressions, and recognizing situations were examined, and the correlations between these abilities and self-regulation were analyzed. As a result, it was found that self-regulation is correlated with the abilities of recognizing situations and taking social perspective, in that order. No correlation was found with the ability of recognizing expressions. It was therefore concluded that self-regulation in adolescents with Down syndrome is related to their abilities of recognizing situations and taking social perspective.

Key Words : adolescents with Down syndrome, self-regulation, internalization of rules